

RUN! RUN! RUN!



冬をむかえ肌寒くなってまいりましたが、走るには良い季節。本格的なマラソンシーズンの到来!ということで“走る”をテーマに本を集めてみました。



『こんなに楽しいのに走らなきゃもったいない!』

高橋 尚子著
ポプラ社
782夕
篠崎ほか所蔵

シドニー五輪金メダリストの高橋尚子氏が走る事の楽しさを伝えてくれます。走ることで得られる事、上手に走るためのコツ、トレーニング方法等を教えてくれて、読み終えた時には、ちょっと走ってみようかなという気持ちになることでしょう。



『アルプスを越えろ! 激走100マイル』

鏑木 毅著
新潮社
782カ
篠崎ほか所蔵

28歳で野山を走るトレイルランニングを始め、40歳で世界最高峰のレース「ウルトラトレイル・デュ・モンブラン」(168km)で3位を獲得した鏑木毅。彼は本書で競技人生やレースの模様などを語っています。レース中に走馬灯を見るなど、その過酷さは想像を絶します。



『空の走者たち』

増山 実著
角川春樹事務所
Fマ
篠崎ほか所蔵

主人公ひとみは、やめていた陸上を再び始め、2020年のオリンピック女子マラソン代表を目指す。その決意の裏に、故郷福島県須賀川町での、意外な人々との出会いがあった。実際に来る東京オリンピック。選手たちはどんな思いを胸に東京の空の下を走るのだろう。



『深川駕籠』

山本 一力著
祥伝社
BFヤ
篠崎ほか所蔵

かごか
深川で駕籠昇きをしている新太郎と尚平。客からの無茶な要望を二人は息の合った走りでも解決していく。そんな中、新太郎は深川～高輪間を往復する駆け比べに出ることに。ライバルは強豪揃い。勝負の行方は——。疾走感溢れる時代小説です。



『馬はなぜ走るのか』

辻谷 秋人著
三賢社
788ツ
篠崎ほか所蔵

競馬中継で必死に走る馬を目にするたびに湧き上がる「馬はなぜこんなに懸命に走るのか」という疑問に対し、率直かつ明瞭な言葉で答えをくれたのが本書である。人と動物の関係についても鋭く洞察している。競馬ファンのみならずおすすめできる一冊。



『鉄道愛』

小池 滋編集解説
晶文社
908テ
篠崎ほか所蔵

明治から平成の文豪たちによる鉄道をテーマにした作品集です。中でもお気に入りのは芥川龍之介の「トロッコ」。トロッコで走る爽快さに夢中になり、帰りの事はすっかり失念している少年の幼さがいとおしく、またほろ苦くも感じる作品です。



『目の見えないアスリートの身体論』

伊藤 亜紗著
潮出版社
780イ
篠崎ほか所蔵

「想像してみてください。目をつぶって全速力で走ることを。」陸上、競泳、ブラインドサッカーなど目の見えないアスリートにインタビューし、彼らの「離れわざ」の秘密を明らかにした身体論。パラスポーツ観戦がもっと楽しくなります。



『認めて励ます人生案内』

増田 明美著
日本評論社
159マ
篠崎ほか所蔵

増田明美さんのマラソン解説が好きだ。走りの特徴だけでなく人となりまで触れてくれる。自らも苦しい時に多くの言葉に助けられたという増田さん。悩める相談者へのアドバイスは的確であたたかい。読んで自分の背中もそっと押してくれるような気がする。